

「信州におけるツキノワグマとの向き合い方ー生態や行動、対処法ー」講演要旨
講師 濱口あかり氏（NPO法人 ツキノワグマ研究会、広域鳥獣保護管理員）

ツキノワグマの生態

- ・ 日本に生息するクマはヒグマ、ツキノワグマの 2 種、全国的分布域は回復（拡大）傾向にある。密度の違いはあるものの全県に生息（県中部から東部が密度が低い）。
- ・ ツキノワグマは、アジアクロクマ（東アジアに分布）に含まれ、クマの中では小型で立ち上がって人の背丈程度（立ち上がって2mのクマはまずいない）
- ・ 嗅覚は犬以上、聴覚も優秀、視覚はそれなり見えているが、主に嗅覚を行動に活用
- ・ クマの特性のイメージとしては、好奇心旺盛、だけどシャイでビビり（慎重）
- ・ 爪が出ていて、木登り、木の中の蜂、蟻の巣の捕食に活用。
- ・ 臼歯、門歯は人と似ていて雑食の特性を示す。
- ・ 春から夏には、柔らかい植物の芽、山菜、液果（イチゴ、桑の実など）、ザゼンソウ、ハイマツ、昆虫などを食べ、秋になると堅果類などを食いだめ（約3.6kg／日の採食）する。
- ・ 交尾期は、夏でオスがメインに動いてメスを探す。
- ・ 冬眠中に出産（2頭）し、メスは飲まず食わずで授乳。そのため、上記の食いだめができないと着床遅延で流産する（前年秋の堅果が豊作だと春の出産個体を警戒する理由）。
- ・ 人里近くで出産、冬ごもりする個体もあり、人に馴れて、攻撃性は低め、のんびりしているように見えるクマ（新世代グマ）も出始めている。

クマと人との軋轢

- ・ 人里に出てくる理由は、人里には、農地だけでなく林縁の液果類など食べに来て、そのうちの一部のクマがそうした箇所を隠れられる箇所として使い、農地等へ進出しているケースがある。
- ・ 人側が無意識で置いた餌（廃棄果実や農作物、防護されていない畑、牛舎の飼料）が誘引していることも大きい原因
- ・ クマは縄張りがない動物のため、餌が楽に食べられる箇所に多くの個体が集まってくる。
- ・ 餌を容易に手に入る方法、場所に執着し、たとえ餌がなくなっても執着し、餌の有無を確認にくる
- ・ 適切に電気柵などでの侵入防止をすることで防除できる
- ・ 軋轢を減らすには、食べ物に執着しやすく、良い餌場に多くの個体が集まる

特性があることを理解し、防除対策により被害を防ぎ、問題グマをつくらないことが住民の安全にも重要。

クマへの対処方法

- ・ 誘引物の除去（廃棄農産物、生ごみなど）・・・農作物の味を覚えさせない、繁殖力を高めない、クマを集めない。
- ・ 緩衝帯の整備（林縁部の刈り払い、見通しの確保）…隠れ場所をなくす
- ・ 物理柵、電気柵等による侵入防止…電気柵の痛みにはクマも慣れない。
- ・ 人馴れなどが進みすぎた問題クマの捕獲。
- ・ クマに出遭わないための正しい対処法は、音を鳴らししてこちらがどう動いているかをクマに気づかせる（避けてもらうこと）。
- ・ 音が嫌いなわけではない。
- ・ クマ糞、糞があれば、クマが近くを使っていた証拠。近づく理由がなければ近づかない。
- ・ クマの爪痕は上から下への痕跡、シカの角こすりは下から上への痕跡なので注意。
- ・ 走っていくことは、クマが隠れている（避けているところ）に近づいてばったり事故の原因になる。
- ・ クマは人より速いので、走って逃げても逃げ切れない。
- ・ 遠い場所にみえたら、クマが気づいていない時は落ち着いてその場所から離れる。
- ・ クマを驚かさずに、安全な場所までゆっくり後ずさりして逃げる。
- ・ 子グマを見つけたときは、一番危険な状況。子グマがみかけたということは、母グマは守りに来るので、近づかずその場所から離れる。
- ・ 人と野生動物の生活圏は着実に近づいているので、様々な対策を複合的かつ継続的に実施して、地域の方々が野生動物への正しい知識を持ち、一丸となって対策に取り組むことが大切。